

就活では「キャリア開発力」が重要に



京都市大学 学生支援部 部長  
住田 曉弘 氏

【略歴】 大手人材・情報サービス会社で人事や就職事業、キャリアカウンセラー養成事業の責任者を経験。人材・教育コンサルティング会社の役員などを経て、京都市大学に入職。複数のキャリア支援関連の資格を有し、多数のキャリア・就職関連組織の重職も務める。

しい学びを続ける習慣の有無が評価される傾向が強くなっていく。

学生の皆さんはどん欲に挑戦してほしい。たとえ満足した結果まで到達できなかったとしても、学んだことを伝えられれば評価される。挑戦した経験のある学生とない学生で、就活時や入社後に大きな差がつく。学びをベースにしたキャリア開発の経験こそ、これからの就活に不可欠だろう。

人生100年時代、「キャリア開発力」は社会人になってから一段と必要となる。自分のキャリアを能動的に作る力の基礎を学生時代に習得するメリットは大きい。

コロナ禍の就活生はともすると孤独になりがちだ。どういった業界、企業に進めばよいか、自分の強みは何か――。一人で考えているとうまく整理できないことも多い。保護者は自分の価値観を押し付けることなく子供の本首を上手に引き出したうえで、世の中の動きを伝え、子供の意欲を高める手助けをしてほしい。その行為はビジネスパーソンとしての自らを整理する良い機会にもなるのではないか。

新型コロナウイルスの感染拡大という想定外の状況下で進化した2020年春の就職活動は、大手企業がオンライン採用に迅速に移行する一方、中堅・中小の多くは移行に時間がかかった。例年は大手が採用を終えた後は中堅・中小が主戦場に。ただ、昨年は後半まで内定をもらえない学生も多く、前半に内定を得た学生との差が鮮明になった。

また、留学、部活動、アルバイトなどの活動が大幅に減少し、学生は自分をアピールする材料の見直しを迫られた。

ここで、重要になったのが日々の大学生生活で培った「学び」だ。この「学び」は単なる知識の習得では

なく、他者との建設的な共同作業や課題の設定、解決策の提案に至る経験など、主体的に考えながら学ぶ経験を指す。低学年のうちからこういった経験を積み重ねることで、社会で必要な基礎力や仕事への向き合い方を身につけることができる。

変化が大きく予測が困難な時代において、必要な力をアップデートする「キャリア開発力」も重要だ。社会の動きをふまえたうえで、自分が進みたい方向に必要な学びを整理し、学んだ結果を振り返るサイクルで、キャリア開発力を高めてほしい。採用の場面でも、学生時代の行動は社会人になっても「再現性」があると考えられ、主体的に新

- この記事・写真等は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。
- 無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。